

TSF女体化小説

いとこどうし(男女)で

入れかわりっ！

実玖みくと理玖りくは同じ年のいところで、幼いころからよく一緒に遊び、まるで本当のきょうだいのように過ごしてきた。大学生になった今では親元を離れ、マンションの一室を借りて二人で暮らしている。

〔理玖の部屋で〕

ある日、理玖が目を覚ますと目の前に自分がいた。

「おはよう、理玖。ふふ、びっくりした？」

理玖はまだ夢でも見ているのかと思った。目の前の自分に話しかけられたのだ。

「そりゃ、驚くよね。私も、さっき起きて鏡を見た時はびっくりしちゃった。・・・ほら・・・。」

相手は鏡を見せた。理玖が鏡の中に見たものは自分ではなく、いとこの実玖の顔だった。

「こっ、これって！・・・あっ！。」

理玖は声すら変わってしまっていることに気づきハッとした。

「どうやら私たち、入れ替わっちゃったみたいね。」

理玖は目を丸くし、信じられないという顔をしている。

「それよりさ、早く起きて。もうお昼過ぎてるし。それに今日はやる事があるんだから。」

「え？」

「今日さ、カレシとデートの約束があったんだよねー。だから・・・私の代わりに理玖が行ってきて。」

「え？・・・え——っ！なんでボクがっ？！」

「だってしょうがないじゃない。体が入れ替わっちゃったんだから。私があなたの体で行くわけにはいかないでしょ？」

「そ、そりゃそうだけど・・・。そんなことより元に戻ることを考えようよ！」

「そんなこと考えたって分かるわけじゃない。理由もわからず突然入れ替わっちゃったんだから。」

「じゃあ、断ればよくない？」

「直前になって断ったらカレシが機嫌損ねそうだし・・・。ね、お願い！代わりに行ってきて！」

実玖は手を合わせた。

「それにさ、今日見に行く予定の映画、理玖も見たいって言ってたでしょ？もちろんお金は私が出すよ。」

「う～～ん・・・。デートなんてしたことないし・・・。」

シャイでおとなしい理玖には今までカノジョがいなかった。

「それに、もし途中で元のボクの体に戻ったら・・・。」

「大丈夫よ。映画見て、そのあと適当にお買い物でもして、食事して・・・。もし、途中で元に戻ったら、どこかに隠れてすぐに連絡して。急いで駆け付けるから・・・ま、なんとかなるでしょ。」

「もし・・・相手に気づかれたらどうしよう？きっとボク、実玖のように振る舞えないし・・・。」

「あはは、大丈夫だって。体が入れ替わった、なんて誰が信じると思うの？」

実玖は明るく言った。

「それも・・・そうだけど・・・。」

「じゃあ、決まりね！」

「あ、いや、でも・・・。」

「もお！時間なくなっちゃうじゃない。早くいかないと映画に遅れるよ！」

実玖は時間を気にして時計を見た。

「早く起きてっ！シャワー浴びたら着替えて。ほらっ！早く早く！」

実玖はぐずぐずしている理玖をせき立てた

〔脱衣室で〕

理玖はパジャマを脱いだ。

やせ形の理玖が昨日から着ていたTシャツは、肉付きのいい実玖の体には少々きつかったようだ。体にぴったりと張り付き、乳房の大きさがはっきりと分かる。